

(PDF版・3)『教会教義学 神論 I / 2 神の現実 (上)』「二十八節 自由の中で愛する方としての神の存在——— 行為の中での神の存在」

(文責・豊田忠義)

「二十八節 自由の中で愛する方としての神の存在——— 行為の中での神の存在」  
(23-33 頁)

「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三つの存在の仕方（性質・業・働き・行為・行動・活動——起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——啓示されてあること・それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〈全体〉）における第二の存在の仕方、すなわち「起源的な第一の形態の神の言葉」そのものであり、「啓示ないし和解の實在」そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの間人イエス・キリスト、「ナザレのイエスとして人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」における神の自己啓示からして、その「神の行為」（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）は、人間を含めた全被造物とは全く異なる「ただ〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」、換言すれば「被造物としての精神と自然に優越したところの」、「〔「神的な」〕精神と〔「神的な」〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」。もしもそうでないならば、神の側の真実としてある「実際の、本来的な、まことにそう呼ばれるべき神の行為の歴史はないことになる〔「われわれだけでわれわれの時間を持っていた時に生じたわれわれのための神の時間」、「啓示の時間」はないことになる〕」、「出来事および決断としての神の決議もなければ、神の業もないことになる」、「啓示もなければ和解もないことになる」、「父からのみ子の永遠的な出生もなければ、永遠にわたって聖霊が父および子から出ずるといふこともないことになる〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、われわれは、次のように告白し証しし宣べ伝えなければならぬにも拘らず、次のように告白し証しし宣べ伝えることができなくなってしまふ。すなわち、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の「根源〔起源〕としての父は子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源〔起源〕である、それ故にその区別された子は父が根源〔起源〕であり、神的愛に基づく父と子の交わりである聖霊は父と子が根源〔起源〕である——この神は、子の中で創造主と

して、われわれの父として自己啓示する、それ故に父だけが創造主ではなく、子と霊も創造主であり、同様に、父も創造主であるばかりでなく、子に関わる和解主であり、聖霊に関わる救済主でもある」と告白し証しし宣べ伝えることができなくなってしまう」。なお、イエス・キリストにおける神の自己啓示については、(PDF版・その1)「<イエス・キリストにおける神の自己啓示>および<その自己証明能力の総体的構造>ならびにくまことのイスラエル、民、イエス・キリストの教会」を参照されたし。

「アル者ガヨリ精神的デアレバアルホド、彼ハヨリ活動的である」というポラーヌスの「その命題は、自然なしの精神について語られる時、いつでも直ちにすべての正しさを失ってしまうのである」。このような訳で、われわれは、「神的存在」について、「いわゆる『純粋な精神的な』解釈に組することはできないということを主張する」。

イエス・キリストにおける神の自己「啓示の中での、また永遠にわたっての神の出来事、行為、生命の特別な自由」は、「[神的な] 自然と感覚世界」を包括した「[神的な] 精神の自由であるということである」。したがって、その自由は、「自然の出来事の偶然性あるいは必然性ではないし、法則性あるいは運命性ではない」。したがってまた、その自由は、そのことを「知り、意志し、自分自身を自分自身でないものから区別し、自分自身でないものを自分自身から区別し、自然を自由に処理して行く<われ>の自由である」。「神的な出来事、行為、生命の特殊性」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方における「人格の存在の特殊性である」。すなわち、その三つの存在の仕方、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事としての「出来事の総内容は、[言葉の語り手である啓示者の] 神の言葉 [語り手の言葉] が「[神的な] 自然と感覚世界」として] 肉となった [その内在的本質である神性の受肉ではなくて、第二の存在の仕方における言葉の受肉、客観的な「存在的な必然性」、  
「啓示の出来事」] ということ、そして神の霊がすべての肉の上に注がれる [その啓示の出来事の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」、主観的な「認識的な必然性」] ということから成り立っている」、それ故に「われわれが出来事として神の存在について語る時」、すなわち神の存在を神の自由な愛の行為の出来事として語る時、われわれは、その「神の行動、……行為について語っている」のである。「聖書に従えば、[イエス・キリストにおける神の自己] 啓示の中でのすべての出来事の先端は、……神がわれとして語り、また語りかけられた汝によって聞かれるということ [あの<総体的構造>の中での神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」・「啓示と信仰の奇蹟」に基づいて神語り給う故に神語り給うことを聞くということ] から成り立っている」のである。「この出来事の中で、[客観

的に可視的に存在している神的な] 自然と感覚世界は、疑いもなく、下位に立つ奉仕する構成要素、換言すれば自分自身の故にではなく、ただその関連性と機能の中でだけ重要な、そのようにして確かに必要な構成要素である」、ちょうどあの〈総体的構造〉の中での「存在的なラチオ性」のように、すなわち三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の实在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）の関係と構造（秩序性）のように。このような訳で、「精神と自然、内的なことと外的なこと、精神とからだを、ここで簡単に均衡状態に置き、……ひっくり返すことのできる関係として取り扱おうとするところの实在論は、偽りの实在論である」。言い換えれば、イエス・キリストにおける神の自己「啓示そのものの中では、疑いもなく〔神的な〕精神が問題である。……ただ〔神的な〕精神の故にだけ、それからまた〔神的な〕自然〔「感覚世界」〕が問題である」。したがって、「F・C・エティンガーの『神の道の終わりは肉体性である』という言葉」は、「ただ……『また肉体性でもある』——すなわち、「肉体性は精神の下位に立つ奉仕する構成要素であるとあえて読むことによってだけ耐えられるものであって、それ自体としては内容的には危険な誇張した言い方である」。なお、「神の自由」については、(PDF版・その3)「キリストにあっての〈神の自由〉」を参照されたし。

そのような訳で、われわれは、イエス・キリストにおける神の自己「啓示の出来事に対応しつつ」、一方では「偽りの観念論」を、他方では「偽りの实在論」を「かなぐり捨てることによって」、先ず以て「神の存在」を、すなわち神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在を、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方、『人格における存在』として理解しなければならない。しかし、そのことでもって、「決して、模範的な人格化された存在が意味されているのではない」、それ故に例えば「イエスは、別段自分を超人間的存在として自覚していたわけではなく、『人の子』語句でもって人間存在の根底を語り続けたただの人であり、ただの人として自らを自覚し、ただの人の真実のあり方を告げた」と、イエスに本来的な人間存在の在り方、模範的な人格を見た八木誠一が述べたような倫理化された「模範的な人格化された存在が意味されているのではない」（『イエス』）。すなわち、そのことでもって、「その人格の实在の中で、すべての存在の充実を自分自身の中で実現し、統合している存在が意味されている」のである。このことは、その「人格の中で」、それ故にその「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然のその単一性〔区別を包括した単一性〕の中でのことであり」、「この単一性〔区別を包括した単一性〕の中で、その〔神的な〕精神性にふさわしい優位性の中で、その〔神的な〕自然性にふさわしい下位性の中で、**それ**ではなく、……また被造物的な人格のような**彼**

でもなく、「本来（そのようにしてまた本来的な認識にとっても）常にわれであることよってのことである」。「われわれは、これらの定式的な言い方で以て、（父および子より出ずる）聖霊の単一性〔区別を包括した単一性〕の中での父および子としての神の三位一体的存在……を解釈する……」のである。「そのようなものとしての、その全体性の中でのこの存在が、神の存在、神性の本質であり」、それ故に「この神性についてさらに何が語られようと、それは、あくまでこの存在の定義として理解されなければならない……〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、第二の問題である神の本質を問う問いを包括した第一の問題である神の存在を問う問いを尋ね求めることによって理解されなければならない〕」のである、それ故に「この存在の定義を念頭において、ヨハネ福音書四・二四のあの有名な定義、『神は霊である』が理解されなければならない」のである。したがって、「正統主義の教義学で普通なされている定義、神ハ自主独立ノ霊デアル、あるいは自ラ存在スル霊デアル等々の定義」が、そのような認識を「念頭において語られた定義である場合に限ってだけ」、すなわち「（父および子より出ずる）聖霊の単一性〔区別を包括した単一性〕の中での父および子としての神の三位一体的存在を、その全体性を念頭において語られた定義である場合に限ってだけ、われわれは、それらの定義に賛成することができる……」のである。

われわれは、今まで述べてきたことからして、「一方で偽りの観念論を、他方で偽りの実在論をかなぐり捨てることによって」、「神が、このように〔神的な〕精神であるということ自体について、……特に強調しなければならない」。言い換えれば、「神の存在」は、「自分自身で知り、意志し、区別する存在」、「神の行為から成り立っていることよって」、「自分自身を通して動かされた存在である」。このような訳で、「神の存在」、「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在は、「抽象的に見られた自然の存在からも、抽象的に把握された精神の存在からも区別される」のである。それらに対して、「われわれが〔「きょうも、きのうも、いつまでも変わらない」イエス・キリストにおける〕神の啓示からして知るところの神の存在」、「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在は、その「全体性それ自身の中で動いている、またそのようにして動かしていく存在である」。「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方であるイエス・キリストにおける『神われらと共に』という言葉、「キリスト教使信の中心」は、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、教会共同性・教団共同性のような「狭い共同体からその事実をまだ知らぬすべての他の人々、広い共同体に向かってのその自己運動において」、その現にあるがままの不信、非キリスト者、

非キリスト教、非知、個体的自己としての全人間・全世界・全人類に対して完全に開かれている」（『カール・バルト教会教義学 和解論 I / 1』）——「このことからして」、「抽象的な自然観あるいは抽象的な精神概念を万物の尺度とする、動きのない自然主義的あるいは精神主義的な理神論の……もろもろの主張」、それに接近した「神秘主義的な汎神論の主張における最高存在あるいはまことの存在あるいは超世界性は、不可能となる」のである。「神の存在」は、「出来事であるということ」、「神の行為の出来事であるということ」、神の自由な愛の行為の出来事であるということ——「この神の存在」は、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における三つの存在の仕方において「ただ単に動かされた存在であるというだけでなく」、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神としての「**自分自身を通して動かされた存在である……**」、すなわちそれは、「それ自身の中で動いている、また動かしていく存在である」。

それに対して、「具体的な自然観と具体的な精神概念、すなわち自然の、また精神の動かされている存在についての知識というもの」、「動かされた自然と動かされた精神」は、「自分自身を通して動かされているのではなく、また一方が他方を通して動かされているのでもなく、むしろそれら両者は、外から動かされているのである」。その両方の「相互の関係の中で、外から、第三の場所から及んでくる運動を通して動かされた存在についての知識がある」。その「第三の場所」は、自然や精神を対象的に了解する、「認識する、意志する、評価する、行為する、身に受けている人間である。**われわれ**が生きているのである」。「今やそのことに基づいて、生ける自然、生ける精神が存在する。自然を具体的に見ること、精神を具体的に把握することは、**われわれ**の働きである」。「このわれわれの働きの中で、……精神が先行し自然が後に従い、精神が主体であり自然が客体であり、自然が質量を形成し精神が形相を形成するという特有な秩序づけが行われる」。個体的自己としての全人間は、自己の身体・肉体と精神・意識を介した、普遍的で実践的な全自然（自然の一部である自己身体、性としての他者身体、外界としての天然自然、第二次的には人間化された自然である人間的自然）との相互規定的な対象的活動を行う。ここに、個体的自己としての全人間の類的な活動や生活がある。それは、人間諸個人による全自然の対象化であり、非有機的体化であり、人間化であり、そのことによってまた人間諸個人は、人間の自然化、人間的自然として有機的自然となる。それは、人間の歴史的行為である。その人間諸個人は、それが感覚的客体としては孤立しているのであるが、現実的な生活過程においては媒介的に他の人間と関係づけられているから、それは協働関係としての社会を構成する。そして、その人間の類（人類）の時間性は、自然史の一部を構成する。そのようにして、「人類は、人間のつくる観念と現実のすべての成果を、それが、＜良きもの＞であれ＜悪きもの＞であれ、不可避免的に蓄積していくよりほかないものである」（『思想の基準をめぐって』）。自然史の一部である人類史の自然史的過程は、自然

史的必然として、経済社会構成の拡大・高度化、科学や技術の進歩・発達、その知識の増大・細分化、生活の利便性の向上という自然史的成果をもたらすと共に、様々な観念諸形態を生み出して行く。それら自然史的成果は、自然史的必然に属しているから、さまざまな規制等によって遅延させることはできても、停滞させたり逆行させたり逆行させたりすることはできないものである。また、そこにおいて様々な観念諸形態が生み出されるのであるが、そのいったん疎外された・外化された・表現された観念諸形態は、それ自体の自己展開過程と自己増殖過程を持ち時間累積されていく。しかし、それは、観念を本質としているから、逆行させたり逆行させたり復古させたりすることができるものである。吉本隆明は、観念の出自とその自体性について「人間の心的な過程が存在するためには、身体が存在は絶対的条件である。それにもかかわらず、人間の心的な過程の内容は必ずしも身体存在の反映ではない」（『行動の内部構造』）と述べている、また科学・技術や生産様式の発達は、遅延させることはできても逆行させたりすることはできない。この意味で、エコロジーの極限に想定される天然自然主義は錯誤でしかないものである。と同時に、人間存在の総体性にとっては、「経済的範疇というものもまた部分にすぎず、〔近代の宗教的形態である〕科学主義における科学が発達し、技術が発達し、未来が描けるというような考え方は、部分でしかない科学を全体として錯誤するところにある」、「社会の経済的な、あるいは生産的な、あるいは技術的な発達に対して」、情念や喜怒哀楽の感情の「非感覚的部分は、それに伴って発達するわけではない」、「マルクスが、人類の歴史において、経済的範疇は第一次的に重要なものである、そしてその他のものはそれに影響されると述べた時、幻想領域の問題は、そういう経済的範疇を扱う場合には大体捨象できるという前提に立脚して述べている」（『共同幻想論』）と述べている。また、マルクスは、次のように述べている——「歴史とは個々の世代〔個体的自己の成果の世代的総和〕の継起にほかならず、これら世代のいずれもがこれに先行するすべての世代からゆずられた〔経済的範疇としての〕材料、資本、生産力〔と共に、言語、性・夫婦・家族〕を利用〔媒介・反復〕する」（『ドイツ・イデオロギー』）、「私の立場は、経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解しようとするものであって、決して個人を社会的諸関係に責任あるものとしようとするものではない。個人は、主観的にはどんなに諸関係を超越していると考えていても、社会的には畢竟その造出物にほかならないものであるからである」（『資本論』）。

そのような訳で、「その中で神が人間の主としてわれわれに会い給う」イエス・キリストにおける神の自己啓示を通して、「神の存在」を、すなわち「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」神の自由な愛の行為の出来事としての「神の存在」を、前段で述べた「人間のそのような働きと混同したり、等置したりすることは禁じられ、阻止されている」。何故ならば、キリストにあっての神は、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との

無限の質的差異を固守するという〈方式〉の下において、神としての神であり、われわれ人間のつくる観念と現実の成果の中で、「われわれを通して動かされた存在……ではあり給わない」からである。もしもそうでないならば、キリストにあっての神としての神、キリストにあっての啓示、キリスト教に固有な信仰・神学・教会の宣教は、フョイエルバッハやマルクスやハイデッガーが客観的な正当性と妥当性をもって根本的に原理的に批判し揶揄したところの、キリスト教やキリスト教の信仰・神学・教会の宣教や「存在者レベルでの神」や「存在者レベルでの神の啓示」や「存在者レベルでの神への信仰」でしかないことになってしまうからである。したがって、神の自由な愛の行為の出来事としての「神の存在」は、「ただ単に動きのない自然、また動きのない精神に対してばかりでなく」、「われわれの動かされ、動かしてゆく存在に対しても」、「自分自身を通して動かされたひとつの唯一の存在として相対して立っている」のである。したがって、まさにイエス・キリストにおける神の自己啓示こそが、自然の一部である人間、自然史の一部である人類史、「人間のつくる観念と現実のすべての成果」、人間の個と現存性(人間の個の時間性、すなわち個体史、自己史)——人間の類と歴史性(人間の類の時間性、すなわち人類史、歴史、世界史)の生誕から死までのすべてを見渡せる場所である。

「人は、人間についての言説を、最も深い形而上学的な背景の前に置くことができる。しかし、人は、その時、〔キリストにあっての〕神とは違った、〔キリストにあっての〕神と対立している『人間』——すなわち、「行き過ぎた高貴」な『**罪深い人間**』のことを語っている」のである。何故ならば、「啓示に従えば」、われわれ人間が、「自分自身を過度に高めつつ、自分自身の活動の中に」、「神の存在」を、「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在を見て取り力を奮わしめることができる」と考えるところのもの……こそが、罪深い人間であるからである」。したがって、バルトは、カントについて、「神のことを、純粹理性の限界と目標の必然的に要請されるべき理念として、また実践理性の立法者および保証人の同じように必然的に前提されるべき理念として定義した時に、……人間について（人間の理性能力の本性の深みについて）力強く……語ったということ以外に何を為したのであろうか」と述べたのであるが、そのバルトは、同じように、『カント』では、自然神学の段階にあるカントについて、次のように述べている——「宗教とは、すべての神崇拜の本質的なものが**人間の道徳性**にあるとするような信仰であるとしたカントは、本源的であるゆえに、すでに前もって**われわれの理性に内在している神概念**の再想起としての神認識という点で、アウグスティヌスの教説と一致する」。しかし、イザベラ・バード

(『日本奥地紀行』)や吉本隆明(『アフリカの段階について 史観の拡張』)は、人類史の原型・母型・母胎であるアフリカの段階や縄文的段階における内在的精神を残していた明治期のアイヌ人について、「**アイヌ人は善悪・道徳の観念、高度な宗教をもた**

ないが、誠実、高貴、立派な生活を送っている」、**「総体としてアイヌ人は純潔であり、他人に対して親切であり、正直で崇敬の念が厚く、老人に対して思いやりがある」と述べている。**また、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという**〈方式〉**を揚棄してしまっ**て、「無限と有限との究極的同一性」**を哲学原理としたヘーゲルは、「神を、永遠に自分のもとにあり、永遠に自分自身から発出し、自分自身の中で、また自分自身の外で、存在しつつ永遠に同一のものであるところの〔自己還帰する対自的であって対他的な、他在であって自在な、全き自由の〕絶対精神の過程として記述した時、そのことは、確かにわれわれ自身の中に基礎づけられた、われわれ自身から発している、またわれわれ自身のところに戻って来る〔自己還帰する〕自然と精神の運動の力強い意味深い記述である」が、「しかしまさにそれ故にこそ、決して〔キリストにあつての神としての〕神の記述ではないのである〔起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準とする時、ヘーゲルのそれは、自然神学の段階における、全く以て恣意的独断的な人間に内在する神的本質の記述である、神の人間化、人間の神化の記述である〕」。その時、その神は、キリストにあつての神としての神ではなく、「人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」ものである（『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）、それ故にその時、「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」し、「（中略）神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……」し、それ故にまた、その「対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」ものである（『キリスト教の本質』）。また、「神をわれわれの絶対依存の意識の由来として、それと共にただ単にすべての宗教の根拠としてだけでなく、……われわれの自己意識全体の彼岸的な根拠として、われわれの認識し行為する現実存在の秘義に満ちた中心として記述した」ところの、「ヘーゲルの強力な痕跡」を持った、それ故に徹頭徹尾自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞した「シュライエルマッハーは、特別な神概念など必要とせず」、それ故にその「信仰論は、自分自身の中で動いているキリスト教的——宗教的な自己意識の純粹な記述」、すなわち「自分自身の歴史と現在の解釈を表現しようとする自己表現としての宣教を目指すものであつた」。また、リッチェル自身の自由な自己意識によって恣意的独断的に対象化され客体化された意味的世界・物語世界としての「神理念の実践的な、宗教的・倫理的な意味づけを目指した」「『世界の中に、世界の上に』（！）います神は、『それが自然からの妨害に対して人間の精神的な自己意識を保ってくれるが故に、人間が尊重する』力である」、「宗教においては、……『人間が、自然の世界の一部として、しかもまた世界を支配するという主張

をかかげる精神的人格として、身を置いている』矛盾の解決が問題である」、「キリスト教は最高の宗教として、人間に対して、最高善を獲得するよう定められた精神的な人格的存在として自分自身を確実に評価すると共に、また世界をまとまった『全体』として評価するよう取り持つ」、「キリスト教的神理念は、あの自己意識とこのわれわれ世界観との間の『理念的なきずな』である」という言葉を、そのまま鵜呑みにしたり模倣したりする時には、「小難を免れて、大難に出会う」ことになる。

「神の存在」は、神の自由な愛の行為の「出来事である」ということ、「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」「神の〔自由な愛の〕行為の出来事であるということ」——「この神の存在」は、「それ自身を通して動かされた存在として」、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（業・働き・行為）であるまことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける神の自己「啓示の中で出来事として起こっており、啓示を通して惹き起こされた〔神的な〕自然と〔神的な〕精神の〔自己〕運動として理解されるということに……よってもってかかっているということに、人はよく注意せよ」。したがって、イエス・キリストにおける神の自己「啓示は、その権威と信頼に値する性質を、〔徹頭徹尾、常に、〕すべての人間的な基礎づけの彼岸〔・外〕において、それ自身の中に基礎づけられている」。したがってまた、「神の命令、神の恵み、神の約束」は、徹頭徹尾神の側の真実としてあるが故に、すなわち「人間的な力あるいは弱さの彼岸」・外にあるが故に、「比べものがないほど力強いのである」。子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事としての「神の業は、……われわれの業に拘束されておらず……それ自身の在り方の中で、〔常に〕われわれの業に先行し、また〔第三の形態の神の言葉である教会の宣教の思惟と語りにおける「先ず第一義的に優位に立つ」原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として〕後続くが故に、勝利に満ちたものである」。このように、「人間に対する神の権利と人間と結ばれた契約の中での神の真実は、それらを確証するためにはただ神ご自身を必要としているだけである」、ちょうどイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、われわれ人間が人間的に所有する啓示認識・啓示信仰には、あの〈総体的構造〉の中での神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」を必要としているように。「神の存在」は、神の自由な愛の行為の「出来事である」ということ、「〔神的な〕精神と〔神的な〕自然の単一性〔区別を包括した単一性〕の中でだけ出来事となって起こる」「神の〔自由な愛の〕行為の出来事であるということ」——このことは、「われわれが、神の存在について語る時に」、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（業・働き・行為）であるまことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおける神の自己「啓示以外のところに視線

を向けようと欲しないとしたならば」、すなわちキリストの特別啓示にのみ、啓示の真理にのみ視線を向けようと欲するとしたならば、「神の存在は、神ご自身の、意識的な、意志され、実現された決断であるということを意味するのである」。したがって、**神の存在は神の自由な愛の行為の出来事であるということ**——「それは、われわれが**自分の現実存在を実現してゆく際になす決断から独立したものである**」、われわれ人間の決断の彼岸・外にあるものである。すなわち、それは、「永遠の中で一度ですべてにわたって力を奮う仕方で、またわれわれの時間の各瞬間ごとに新たに実現され、常にそのような神的存在でないところのものに対して完結した、自分を完結させてゆく現実として相対して立っている」。「この自己運動の中での神の存在」は、すなわち神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事は、「**<神的>精神である**」。また、それは、「**<神的>自然である**」。このような訳で、神とは異なる「いかなるそのほかの存在も、徹頭徹尾、その行為の中にあるわけではない」し、「それ自身の、意識的な、意志され、実現された決断ではない」。したがって、「ただ罪の幻想の中でだけ」、「人間は、自分自身に対して、あるいは自分自身の投射としての世界の総内容（≪個体的自己の成果、その世代的総和、その時間性としての人類史的成果、「人間のつくる観念と現実のすべての成果」≫）に対して、そのような存在を帰することができるだけである」。したがってまた、そのような人間に対して、神が、イエス・キリストにおける神の自己「啓示の中で出会い給う時、彼のその幻想は破壊され、人間から、全世界から、そのような存在は否定されてしまうのである」。バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——イエス・キリストが、われわれ人間に対して、第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書およびその聖書を自らの思惟と語りと行動における原理・規準・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の宣教を通して「同時的となる時と所」、あの<総体的構造>の中での神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて『神われらと共に』が神ご自身によってわれわれに語られるところ」においては、「われわれは神の支配のもとに入ることを、承認し確認するのである」、「世、歴史、社会を、その中でキリストが生まれ、死に、甦られたところの世、歴史、社会として、承認し確認するのである」、「自然の光の中でではなく、恵みの光の中で、それ自身で閉じられ、かくまわれた世俗性は存在せず、ただ神の言葉、福音、神の要求、判定〔裁き〕、祝福によって問いに付され、ただ暫時的にだけ、ただ限界の中でだけ、それ自身の法則性とそれ自身の神々に委ねられた世俗性があるだけであることを、承認し確認するのである」、と。

そのような訳で、われわれが、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>、起源的な第一の形態の神の言葉自身の出来事の自己運動に基づいて、「啓示の中で人間に出会う裁きと恵みを承認するならば、人間は、そのよ

うな存在を、自分自身で知り、意志し、区別する存在を、自分自身を通して動かされた存在を、人格における存在を、神にのみ帰するのである」。したがって、われわれは、「自分自身の、意識的な、意志され、実現された決断の中での存在である人格的存在を、厳格に本来的に受け取るならば」、「ただ〔神の自由な愛の行為の出来事としての〕神の存在においてだけ理解するのである」、それ故にわれわれは、イエス・キリストにおける神の自己啓示を通した「父、子、聖霊の存在の仕方の中での神の存在〔父、子、聖霊なる神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在〕においてだけ理解するのである」。したがって、「起源的に、本来的に、そのような神の存在……の外にあるそのほかどの存在も、今述べた意味での存在、人格存在ではないのである」。したがってまた、「そのような神の存在……の外〔・彼岸〕にある〔神とは異なる〕そのほかどの存在も、ただ副次的な意味で、ただその恵み深い創造と保持に基づいてだけ、そのような存在、人格存在である」。すなわち、そのことは、「神が罪人をご自身と和解させ給う恵み深い和解を通して条件づけられ、その未来的な救済〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」〕を念頭に置いてのことであり、またこれらすべては、ただ神の言葉と啓示を通してだけ認識することができるのである〔客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」とその啓示の中での主観的側面としてのキリストの霊である「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」に基づいてだけ終末論的限界の下で認識することができるのである】」。このような訳で、「人間が本来的に人格的存在であるのではなく、神が本来的に人格的存在であり給う」。すなわち、「神が非本来的な人格的存在であるのではなく、われわれ〔人間〕が非本来的な人格的存在である」。イエス・キリストにおいて自己啓示された三位一体の「神が、その行為〔その三つの存在の仕方〕の中で存在し給う」、その「神がご自身の決断であり給う」、その「神が自分自身から、自分自身を通して、生き給う」。

イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、先ず以て、第二の問題である神の本質を問う問いを包括した第一の問題である神の存在を問う問いを尋ね求めなければならぬ限り、「神が何であり給うかについてのすべての言明、あるいは神はどのようなであり給うかについてのすべての説明は、あらゆる事情の下で、神がその行為と決断の中で何であり、どのようなであり給うかということを述べ説明しなければならない」。したがって、われわれは、先ず以て、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの名」において、その内在的本質である「失われない単一性」・神性・永遠性を認識し信仰しなければならない。言い換えれば、われわれは、先ず以て、イエス・キリストにおける神の自己「啓示の中で、神は生き給う」、「神は存在し給う」という事実によってとらえられることに基づいて、すなわちあの〈総体的構造〉の中でそのそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係

と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・標準として（聖書を媒介・反復することを通して）、「神は生き給う」、「神は存在し給う」という事実を把握することができるのである」。このことでもって、「神は生き給う」、「神は存在し給う」という事実は、ただ単に最高の生、ただ単に無比な生であるだけでなく、むしろ起源的、本来的に、ただ一つの唯一の生であるということが言われている——「最モ本来的ナ仕方デハタダ神ダケガ生キテイルト言ワレルコトガデキル」。したがって、われわれが、「その創造に基づき、イエス・キリストの甦りに基づく希望の中で生命を持つとするならば、このわれわれが生きるということは、神が生き給うということと決して混同されてはならない」のである——「人間の人的存在がわれわれの人的存在である限りは、われわれは一切の人的存在の終極として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが、しかしそれと同時に、人的存在がイエス・キリストの人的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰に由って生きるのではなく、神の子が信じ給うことに由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある**主格的属格**として理解された「イエス・キリストが信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、**われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神である**ということにおいてのみである」（『福音と律法』）。

そのような訳で、「**神についてのさらに引き続いてのすべての言明の正当性**」は、「その言明が、生ける神についての言明であることによつて」、「神は生き給う」、「神は存在し給う」ということとわれわれが生きるということとの**混同を中止し、神の生命とわれわれの生命の間のそのような等置と対立を回避する……**ということによつてもってかかっている」。言い換えれば、その「言明の正当性」は、その「すべての言明」が、「神は、ただその行為〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕の中で、現にあるものであり給うが故に、ただその行為〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕の中でだけ見出されるべきであるということに〔われわれが〕拘束され続ける時に、自ずと起こる」のである。言い換えれば、「われわれは、まさに神の行為〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕の中でこそ神の存在〔神の自由な愛の行為の出来事としての神の存在〕と関わらなければならないが故に」、「すべてのわれわれの思想が、神

の行為〔神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事〕を通して捕らえられ続けるならば、「その時には、われわれの思想は誤りに陥ることはない」し、それ故に「われわれの思想は、おおっぴらにあるいはひそかに〔自己表現としての〕われわれ自身についての思想〔自己表現としての宣教〕となることはあり得ない」のである。「神はその〔イエス・キリストにおける〕啓示の中で」、「現にあるところの方であり給う」。言い換えれば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での客観的な「存在的なラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の實在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書（その最初の直接的な第一の、「啓示ないし和解」の「概念の實在」、すなわちイエス・キリストによって直接的に唯一回的特別に召され任命された預言者および使徒たちのその人間性と共に神性を賦与され装備された「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）の中で、「現にあるところの方であり給う」。